

# 頭陀袋

平成二六年五月号

発行 中山かんのん

恩林寺



中山中学下、電話三四一―二四五

## \* お施餓鬼の由来について

目連尊者（お釈迦様の弟子）はあるとき、自分の母は亡きあと、どうなっているかを神通力をもって探したところ、餓鬼道に落ちて、肉は痩せ衰え、骨ばかりで地獄のような苦しみを得ていた。木蓮尊者は神通力をもって母を供養したいと思つたがどうしても自分の力ではどうすることもできなかつた。木蓮尊者はお釈迦様に、どうかして母を救うことができないうか？とたずねると「お前の母の罪はとても重い。生前は人に施さず自分勝手に振舞つたので、餓鬼道に落ちたのだよ。」夏安居（げあんご）、即ち雨季の修行の期間が済んだあと、ご馳走を用意し、修行の坊さんにお願ひして供養しなさい。」と、言われた。木蓮尊者はその通りにすると目連の母は餓鬼の苦しみから救われた。といわれています。

もう一説には

お釈迦様のお弟子である阿難尊者は静かな場所座禅瞑想していると、焰口（えんく）という餓鬼が現れた。痩せ衰えて喉は細く口から火を吐き髪は乱れ、目は鋭く奥で光る、醜い餓鬼であった。餓鬼は、「阿難よ、お前は三日後に死んで私のような醜い餓鬼に生まれ変わるだろう。」と、いった。阿難は「どうしたら私はその苦難からのがれることができるのか？」と聴くと、餓鬼は、「其れはわれら餓鬼道に落ちて苦しんでいる衆生に飲食を施し、

佛法僧の三宝を供養すれば汝の命は延び、我等もまた苦難を脱することができるであろう。」と、言った。しかしそのような金銭のない阿難は釈尊に助けを求めた。釈尊は、「観世音菩薩の秘呪がある。一器の食物を供えこの加持飲食陀羅尼（かじおんじきだらに）を唱えて加持すれば、その食べ物は無量の食物となり、一切の餓鬼は十分に空腹を満たされ無量無数の苦難を救い、施主は寿命が延長し、その功德により仏道を証得することができる。」と、いわれた。阿難は早速その通りにすると、阿難の命は延びて救われた。これが餓鬼の起源といわれています。

この二つの話が混同され、おおくの寺院では、盂蘭盆の時期にお施餓鬼が行われるようになった。と、言われております。

日本におけるお盆の場合、各家の祖霊は年に一度、家の仏壇に帰ってくるものとしてお盆の期間中、毎日、供物を供える。それと同時に、無縁仏となり、俗世をさまよう霊（水子）あるいは供養されなくなっている一切の精霊（戦没者、地震被災者、交通事故死者、三界萬霊を供養すること）であります。

また、近年では、餓鬼という言葉が差別に当たるのではないかという説もあり、こうした法要を水陸会（すいりくえ）と、言うこともあります。この法会は何時行うというものはなく、仏様のご供養というものには決まつた日にちを指定するものではありません。

高山では本町会、東山連合寺院主催で、毎年八月十九日頃、お盆の精霊送り、川せがきという法会を柳ばしで行っております。

\*恩林寺では県内のお寺さんの日程もありまして、六月二十九日（日曜日）を計画いたしております。ご参詣のご縁をいただきたく追つてご案内もうしあげます